



製鉄所システム室の前野欣一氏が製鉄所におけるシステム化について講演された。在学生にとっては実際の場の話聴く格好の場であったし、卒業生にも生き生きとした他社の例に学ぶ研修の場であり良い刺激であった。

夕方からは祝宴があり、創設当時の関係者、旧教職員もまじえて、そろそろおつむが薄くなり始めたり白いものがまじり始めた40歳前後の1、2期生から、最近特にふえてきた女子卒業生も合わせ、200余名の卒業生が歓談を楽しんだ。この学科の創設にたずさわった昭和47年までは教授であった小笠原暁氏（現兵庫県副知事）も、シンポジウム、祝宴と全行事に出席され、わが子、わが学科の成人を喜ばれ、また今後への期待を述べられた。

理工学部の経営／管理工学科、情報工学科と、経営学部との隙間を埋める学科として、このような学科が育ってきたことの意味は大きい。理工系・文科系という単純な区別で、文科系にされてしまった学生の中にも、論理的思考や、分析力や総合的発想に優れ、数理的分析やシステム設計に能力を発揮できる者は多い。また、ハードウェアから見た計算／情報システムとは別に、経営や運用の立場からの情報学もほしい。そういう点では、まだまだ、未開拓の分野もある。

それでも、20年経ったこの管理科学科にも問題点や悩みもある。ことに、現在の学科の上に大学院を設置したり、学科を学部へ拡充したりということを考えるときには、文部省の大学設置基準や要綱などにしたがわねばならない。しかし、そこには、新しい分野、たとえば経営管理、経営情報、管理工学などを中心とした、学科や大学院の研究科を、経営系の学部の中につくってゆくことは、そのような基準がなく、かなりむずかしい。たとえ

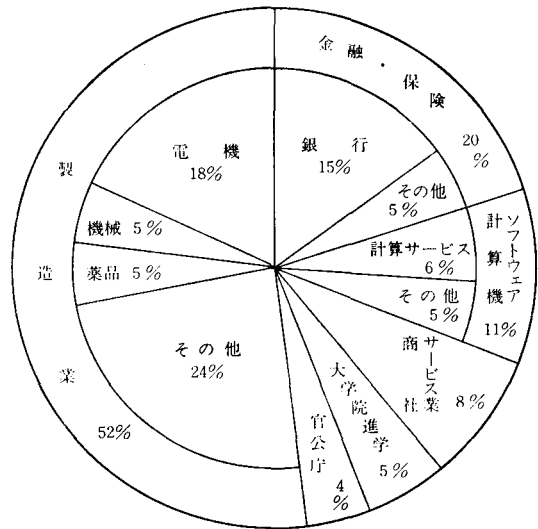


図2 神戸商大管理科学科卒業生の昭和52～57年約300名の就職先

ば、経営学科に必要な主要学科目（講座に相当する単位）には、伝統的経営学のものも多く、それらすべての要件（教員構成、授業科目）を満たしたうえで、新しい分野にも教員をもたねばならないことになっており、よほどの大きい世帯でないといえずかしい。

OR学科やQC学科という狭い学科まで、日本では作ることはいないかもしれないが、新しい分野や学際的の特色のある学科をつくることに、もう少し融通性があってもよからう。日本OR学会が25周年に際してつくった長期計画の中にもある、ORの公的地位の向上、のひとつとしてとりあげてもよからう。（真鍋龍太郎）